

防衛隊員

勝連村字津堅 知念 彦治 (三二歳)

津堅は県庁、軍から避難命令が下って島を立退きになったが、島を守るという残った者もいたから、沖繩本島ではかえって戦さしはしぎきれないと考えて島に戻ったのもいたが、本島の中部あたりに避難したのはまさきにたたかれてすぐ捕虜になったからあれたちの考えが結局は正しかったかもしれないよ。しかし、津堅は後でいちばんの激戦地になっています。

妻の話によると、津堅に米軍が上陸してきたときは守備隊とか防衛隊とかで突撃が四回も行われて、住民で残っていた者は各自の防空壕にかくれていたが、あとで西海岸の壕に追いやられて、その壕にかくれていたら、また本島に避難しなさいという命令がでて、本島から逃げてくるときは夜中にサバニを出して、漕いでいくと、サバニは機銃で穴があいているので水がはいつてきて、着物をひき裂いて穴をふさいで、ようやくこの島についたのが夜中の三時ごろだったそうです。

私はそれよりまさきに防衛隊にとられて球部隊の船舶中隊に入隊して与那原の雨乞森に配置されていました。島から十八名が防衛召集されて同じ隊にはいつています。船舶隊というのは特攻艇の部隊です。隊長は大坂出身の岡部隊長でした。特攻艇といっても全然効果はなかったですよ。われわれは海岸まで艇を出したんですがね、出撃しようとしたらもうアメリカは探知して海岸のところでずいぶん

ずっと沖の方へまわって泳いでいきました。この港川は、与那原から摩文仁に撤退するときも通ったんですが、この頃はもう米軍は上陸している時で、そのとき私は伊舎堂の大きな男と、久手堅の新里という人から頼まれて十四、五歳の女の子をつれていたんですが、海岸は歩けなくなっているし、そのふたりは泳ぎができなくて、ふたりを背負って沖をまわろうとしたんですが、ふたりの重みで自分までが助からないとわかって、とうとう女の子はなげだしてしまっただけもありました。

奥武島に上陸すると、残っている家は三軒だけで、そこは占領されていましたが、アメリカは夜は向いの丘の上に引揚げていつて、そこにキャンプを張っているわけです。そこは第二線ですから電燈をあかあかとつけて、ラジオも大きく鳴らして、もう戦争という気分はないです。

私はここで津堅の様子をさぐるうと思っていましたら、奥武の人で横井藤正さんが島にのこっていて、その二階に海軍の中尉がかくれています。この人がニュースを伝えてくれたわけです。知念と津堅のあいだは昼は危険だが夜は安全だといわれて、それで私は夜のうちに津堅に渡る決心をしたわけです。

奥武から久手堅まで夜のうちに泳いで、そこから上陸して安座間の方にまわっていくと、そこには津堅の人たちが集まっているという話でした。安座間の人たちに伝言を頼んで、津堅の者は四、五日後の何時何分に海岸に集まれ、その時はできるだけ食糧をもってこいと伝えておいて、自分は地図をたよりにクリ舟をさがしに行つたんです。すると海岸の松林のところにちゃんと二隻かくしてありま

にたたかれてしまいましたよ。これでは出撃もできません。若い中尉がまさきに一隻だけだとびだしたことはあったがこれも選つてこないからどうなったかわかりません。中城湾の沖は艦隊にとり囲まれているからどうにもならんすね。出撃は準備しても上からの命令がないといくら隊長でも勝手に動かせなかつたですから出撃するまえにやられてしまったですよ。われわれはこれで戦争ができるかと言ったもんです。

米軍が与那原方面に侵入してきて、部隊は南部に撤退したんですが、それから二週間あとは玉砕してしまいました。摩文仁に撤退するとき、ほかの防衛隊員は解散させられて知念岬方面に逃げたんですが、私だけが隊長の当番兵として摩文仁にまでついていたわけです。摩文仁でいよいよ解散というときに、六月十九日か二十日と記憶していますが、隊長が、ここから泳いで島に帰らなさいと言って、地図を書いた紙きれをくれたです。その地図は、知念半島の先に軍が隠してあるクリ舟の置場を書いてあるわけです。軍はいよいよ最期の場合のことを考えて内地に連絡にやるために二隻のクリ舟を擬装して隠してあったが、もうこうなつては与論島まで行けるものでもないからおまえたち使つて命を助けなさい、というわけです。そのころは海には艦隊がいるし知念に行く途中の港川あたりには米軍が上陸していますから、弾が激しいから注意して行きなさいと言われて、私は水筒に地図を詰めて、摩文仁から知念岬に向つて泳いでいったわけです。摩文仁から奥武島(玉城村)までが一晩、それから奥武から久手堅(知念村)までが一晩かかりました。港川では橋は敵に占領されて探照燈でその辺を照らしているもんだから、

した。約束の日時に海岸に行つてみると、津堅からきた防衛隊の十八人、全員傷ひとつなくて集まっているんですよ。まったく奇跡みたいでした。そのうえ、友軍の陣地から米を盗んできてこれも舟にのせたもんです。

島がアメリカに占領されていることは知っていましたが、それでも家族がどうなっているか心配だったので島に渡つてみたわけですが、夜中に舟を漕いで島にきてみると、島は家一軒ものこらず焼き払われて、島の人たちもどこへ行ってしまったのか、完全に無人島になってしまつていたもんです。米軍の施設が少しはありましたが、部隊は引揚げてしまつて居らんわけです。

われわれが上陸してみると食糧はたくさんあるわけです。芋が三〇〇斤ぐらい積んであるし、南瓜(カボチャ)も黒砂糖もイモクズ(濃粉)もあるわけです。われわれはこれを集めて東の山にかくれました。そのうち、また上陸してきた米軍に捕虜になつたわけです。そのうち家族は勝連半島の南風原の収容所に無事にいることがわかりました。

津堅島防衛隊

勝連村字津堅 安里 義三 (十七歳)

防衛召集

戦争まえ、私はサバニ(クリ舟)に乗って漁をやっていたが、十九年ごろから週に三回は青年学校があつて軍事教練を受けるように

なりました。学科は国民学校の先生が、戦闘訓練は退役軍人の兵長がやっております。この兵長は勝連の人です。

青年学校が終るとすぐ防衛隊にとられたわけですが、第一回入隊は島尻にやられて、第二回の私たちはこの島の守備隊に編入されたわけです。第一回召集は年輩者だけで十八名、第二回は十六歳から十八歳までの青年で、二十年にはいって、二月空襲でやられた後ですから三月ごろだったと思います。青年学校を終わってから防衛隊へはいるまでのしばらくは青年団として毎日陣地構築作業をやらされました。

この島に最初に軍がやってきたのは、私が六年生のときで、このときは兵隊が鉄カブトをかぶっているのを見ておそろしく思ったものです。高等二年を卒業するとすぐ徴用されて読谷飛行場に行き、一か月満期で島へ帰ってくると父親が伊江島に徴用でひっぱられているので、そこで私が代りに伊江島へ行って飛行場建設作業をやり、そこから帰ってくると津堅でも陣地構築がはじまっていて、そこでまた毎日陣地作業をやりながら青年学校へ通っていたわけです。

私の兄は、学校を卒業してすぐ南洋へ漁業移民で行ったものだから召集を受けて島へ帰ってきても軍事教練ができてないわけです。それで、私が教えることになって、庭で天びん棒をかつがせて、軍隊の基本動作を教えたりしました。それから兄は、金武の拓南訓練所にはいって、軍事訓練を受けて、入隊しました。この兄は、豊見城の海軍壕に工兵として行って、そこで戦死したそうです。

私たちは、防衛隊に入隊して、新川グスク（城）の守備隊本部に集められ、そこで亭島隊長から訓示を受けました。「おまえたちは

緒戦

私たちの砲兵陣地はクボー御嶽にありましたが、そこから与勝半島が正面に見えるわけです。四月三日ごろから艦砲が始って、アメリカの艦隊が中城湾に入ってきました。私は双眼鏡でその動きを見張っていましたら、ちょうど私の家族が避難している浜屋のところに敵が上陸するのが見えるわけです。私たちの野砲はそこに向けていて、今にも発射しようとしているわけです。私は「向うはみんな避難民だ。自分の家族もそこに居るんだ」と言って撃とうとするところを止めたんです。

この夜のうちに私の家族は浜屋から島に逃げてきています。サバニをさがして島に漕いで来たわけですが、親爺の話だと、サバニは機銃で穴があいているし、一隻に十二、三名も乗っているで舟が沈みそうになり途中の無人島で半分はおろして、二回往復してやっと島へ帰ってきたそうです。島の西の浜に上陸すると、友軍の歩哨にみつかって、「そこをまっすぐ行くと地雷原がある」と注意されて、その兵隊の案内でやっと部落までたどりついたそうです。そのとき、弟の吉雄は地雷を踏みつけてしまったそうです。さいわい不発で、命びろいしたものです。

与勝半島から引揚げてきた住民は、軍の壕に集まってきたんですが、軍の壕には絶対に入らなと言われて、海端の下の方に、軍の陣地とは離れたところに壕を掘って入りました。この夜のうちに避難した人たちはほとんど島へ戻ってきています。そして、ちょうどその直後に、この島に最初の米軍があがってきたわけです。

これは本格的な上陸ではなくて、偵察隊だろうと言われていま

今日から帝国軍人である」と言われて、下着類まで全部脱がされて、フンドシを締めさせられました。下着はいいのだが、軍服はダブダブで、麻袋にはいっているような感じでした。星一つつけられて二等兵でした。まだ十七歳で体が小さいもんだから、三八式小銃の弾をこめるのになかなか苦労しました。

野砲、歩兵、機関銃隊に分けられて、私は砲兵隊にやられて、新川グスクの三六陣地に配置されました。兵舎は十・十空襲でやられてしまっ、壕のなかで寝るしかなかったですよ。新川グスクは昔の城跡に三段式の壕が掘ってありました。上段、中段は昔からある洞窟で、その下にもう一つの壕が掘ってありました。これが三六陣地です。

島の住民は、鳩川崎から津堅バンタ（端）の海岸に横穴壕を掘ってあって、そこに避難するようになっていました。十・十空襲まえの大坂の九連隊がいたころは、各家の壕は豚小屋の上にサンを渡して、その上に草と土をかぶせて、そんな簡単なものでした。九州部隊がきて、これではママゴト遊びだと言って、それから本格的にハッパをかけて横穴壕を掘りだし、住民の壕も掘りなおしをやらされたんですが、結局この壕は未完成のまま米軍が上陸してきたわけです。

住民はなるべく宮崎に疎開するようになってきたんですが、疎開したのはあまりいなかったです。私の家族は、山原に避難しようとサバニで引越しをはじめたんですが、途中から、勝連城の浜屋に知り合いがいるからと父親が言って、浜屋に避難することになりました。私はそこから防衛隊にとられたわけです。

す。

夜の三時ごろでしたか、大石先生（大石光徳）が敵の上陸部隊を発見して陣地に知らせてきたわけです。電話が鳴って、とび起きて、すぐ戦闘準備にかかりました。相手は偵察が目的らしく、向うからは撃つてこないわけです。

私はクボー山から北側に砲を引っぱっていた。その間に射撃がはじまった。こちらは機関銃とき弾筒で集中攻撃です。向うも反撃してきたが攻めてはこないです。与勝から渡ってきた女たちがつかまって尋問されていたそうですが、この射撃の間に逃げてきていた。敵は間もなく後退して平敷屋（勝連）方面に逃げていきました。暗闇のことだから混乱して、ゴムボートが四艇ばかり置き去りにされていました。米兵は四、五名ぐらい殺されていました。それに軍用犬も。

この撃ち合いでこちらも何名かやられています。このとき、うちのおじさんの糸満さんが弾にあたって死んでいます。この人は避難民ですが、ハカンメーという共同墓地のところにかくれていたんです。そこは敵が上陸するおそれがあるから住民は立退けという命令があったんですが、この家族は立退けなくて、そこへ上陸してきたわけです。撃ち合いがはじまって、それでびっくりして、木の上に登ってかくれていたら、流れ弾にあたって即死です。

それに、友軍では砲兵隊の兵隊と軍曹、二人がやられています。

これで、米軍はこの島に部隊がいることがわかったわけですから翌日は輸送船から南の浜に上陸してきました。私と幸良英吉はク

ボー山の陣地で、大きなユーナ木にかくれて見張りをやらされてきました。はじめは、M型上陸用舟艇が浜に近づいてきて、その中から小型のVP型がとびだしてきて、VPがずつと浜の方までつっこんできたわけです。すると、歩兵がカービン銃を連射しながら上陸してくるんですよ。第一回の上陸部隊は歩兵が三、〇〇〇人、水陸両用戦車が八五台だったと覚えていますが。私は兵力を勘定する係でしたから。

こちらは南海岸の岩の下に重機関銃陣地がありましたから、上陸してくる歩兵をとらえて、向うが散開しないうちに一斉に機銃を浴びせたわけです。クボー山から見ていると、上陸部隊は水ぎわでバタバタ倒れていくんですよ。棧橋の沖にある浮(ブイ)のところまで真赤な血がひろがっていくんですよ。VPから五〇名ぐらいずつかたまって出てくるところを重機で次々になぎ倒しているんですよ。

戦車は八五台、北の浜まで上ってくとそれ以上は進めないわけです。浜には地雷が埋められているから、それを発見して向うは動かないわけです。しばらくしていると、後からきた一台が、これは地雷を埋めてない一本道をみつけて、これを突破すると、後のものがそれに続いて、蟻の行列みたいに一列になって島にあがってきたわけです。

戦車の後からついてきた歩兵はほとんどやられてしまっています。生き残ったのは、泳いで東側に廻り、燈台下の浜から上陸しました。一台の戦車はまっすぐに三六陣地に突進してきました。今学校の運動場になっているところ、そこまで接近したとき、私たちの野砲がこれを撃ちました。この弾は信管を二ミリ切ったやつで、ゼ

でした。部落はおおかた焼かれてしまって、石垣だけしか残っていない状態でした。

次の日、第三回目の上陸がありました。今度は今のホワイトビーチの辺りからまっすぐに水陸両用戦車でやってきて、島の北側からあがってきました。この日の戦闘は朝の九時ごろから晩の六時ごろまで、一日じゅう激しくやり合っています。

私たちは部落の石垣囲いの中に身をかくして、敵味方いり乱れての白兵戦になりました。私らはこの日はアメリカのカービン銃を使っているんですよ。これは前の日に米軍からぶん取ったものですが、この方がつかいやすいんですね。日本軍の三八式は弾をこめるのにすごく力がいるし、長すぎてじゃまになるんですよ。ぶんどってきたカービン銃を防衛隊長の荒井軍曹が撃ち方を教えて、これを使ったわけです。これは弾をこめるのにピンを動かすだけです。カービン銃は使いやすいです。それでみんなは三八式を叩き折ってカービン銃を持ったわけです。弾薬は、あちこちに赤い旗を立てた弾薬補給車がとまっているわけです。これを襲撃して手にいれたわけです。

銃に着剣をして、屋敷囲いの中にたてこもっているわけです。裏側に逃げ口をつくって正門で撃ち合っているんですよ。この部落は狭い道がいりくんでいますから、あちこちで敵味方がぶつかってしまします。弾を撃つのが間に合わなくて銃剣で突き刺したこともあります。相刺しということもしょっちゅうありました。石垣の向うに鉄カブトが見えるからそれに撃っている、急に後から撃ち返してきたこともあります。あれはオトリですね。相手を倒したら、匍匐前進していった、まずポケットをさぐるわけです。こちらはもう

口距離で発射するわけです。戦車はあわててひっ返していったんですが、これについてきた歩兵は全滅です。

この射撃で友軍の主力のありがわかってしまったんですね。燈台の方に向かって進んでいた戦車隊が反転して、こちらの方へ向ってきだしたわけです。燈台と三六陣地の間に部落があるので、戦車は部落へ向っているわけです。部落の周辺には機関銃陣地がめぐらしてある。で、そこでものすごい撃ち合いになったんですよ。

燈台のところには、もとカノン砲陣地があったんですが、この砲は本部に移して、電信柱でつくった偽砲をすえつけて網をかぶせてあったんです。戦車隊ははじめそこへ向っていたわけです。ほん物の陣地はもっと内側へ移してあるんですよ。新川グスクの三六陣地を中心に、森ノ中、八陣地、十二シヨカ、北側に、歩兵部隊、A中に野戦病院、ワナ陣地、C陣地、A1陣地などがありました。十二シヨカという陣地には十二センチ砲があったんですが、これは戦車砲の直撃弾を受けて全滅しています。戦闘はだいたい部落の範囲内で行われました。

この日の戦闘はぶつとおし二〇時間ばかり続いていました。夜になって米軍の主力は撤退していったんですが、東側(燈台側)は占領されて、そこに小部隊がこっていました。友軍はこれに夜襲をかけ、ほとんど全滅させています。なかには、赤十字の旗をぶんどってきた初年兵がいます。これは隊長にさんざんしかられていましたよ。

この戦闘で友軍はものすごい損害を受けて、三五〇名いた地区隊から、元気で残っているのはたったの六〇名ばかりというありさまです。食糧がないから腹が空いている。それで相手の体から食べ物をぶんどるわけです。それからタバコも。食べ物も取って、短剣を抜いてとどめをさすわけです。死んだ人というのは赤い血は出ませんね、黒い血です。そこで相手の銃をぶん取って、これでまた闘うわけです。

夜になってから、知念半島の本部から撤退命令が出たそうです。このとき生きのこっていたのはわずか三〇名ばかりです。

撤退

暗くなってから、サバニをさがしに行つて、舟は機銃でほとんど穴が空いているから、これをボロきれで穴をふさいで、泊浜の方に一か所に集めて、これでいよいよ撤退することになりました。このとき、島には負傷兵が三〇名と補助看護婦三〇名、それに住民はぜんぶそのまま残っています。この島ははじめから玉碎の覚悟でしたから、兵隊の俸給なども全部焼き捨ててしまいました。

サバニで、今のホワイトビーチの浜に無事着いて、もう舟はいらんから流せと言われて沖に流してしまつたんです。後で聞いたら、風は北から吹いて、サバニはほとんどどの津堅に流れついていたそうです。それをみて、島の人たちは、部隊はもう全滅したんだと思つたそうです。夜が明けたら、浜に流れついたサバニをめがけて艦砲の集中射撃がきたそうです。

私らはこの夜のうちに中城湾の海岸づたいに与那原まで行くつもりで、歩兵隊が先頭に立つて行軍しました。地区隊の次の任務は、与那原の球部隊の本部に応援に行くことでした。今の、川田

の製糖工場のところまでくると、そこから先は米軍の占領地帯になっていて、川田から照間まで鉄条網が張られていて電気が流れているようなんです。先頭の歩兵がこれにひっかかってしまつて、機関銃がダダダと鳴りだしたんです。こちらも応戦しながら後退していつ、山に逃げて、そこで昼間じゅうはかくれていました。

付近を偵察してみると、平敷屋の部落はもう占領されていて平和になっていました。部落の人たちは壕の中から世帯道具を運びだしてもとの家に戻っていました。

玉城一等兵は、これは津堅出身の現地召集兵ですが、彼が住民から着物を借りて変装して、勝連の村役場まで行つてみたわけです。役場の建物の中では、五、六名の米兵が事務をとっているだけで、戦闘部隊は毎日嘉手納から戦車で通つてくるということでした。米軍陣地に攻撃をかけようということでしたが、これはどういうわけか中止になりました。

午前十時ごろ、ホワイトビーチの浜にジープがやつてきて、六名で食糧運搬をやるの見えました。吉岡上等兵が分解して運んできた重機を組立てはじめたんです。これで撃とうというわけですね。そこへ隊長がやつてきて「止める」と言つたわけです。たつた六名をやつつけるために、向うが反撃してきたらこちらは全滅するしかないからと。

夜になって海岸からサバニをさがしてきて、十二隻ばかり集まつた。目標は北、先頭についてこい、と言われて、着いたところは岬の反対側のヤブチ島でした。そこに上陸して、舟はひきあげてアダン薬で偽装しておきました。翌日の午前十一時ごろ、屋敷名はずぐ目光弾が飛んできて、その後から艦砲がやってきました。私らは海にとびこんで首だけだしてしまいました。しばらくして向うから足音が聞こえてきたから、敵だと思つて、小銃と手榴弾を構えて戦闘配置についたわけです。こちらから「松」と合言葉をかけると、「竹」と返ってきました。

それは従兄の官城シンシの一隊であつたわけです。彼らは、湾の北側に舟をつけて、そこから歩いてきたというわけです。しばらくすると、東側の、板良敷の方からも一隊がやつてきて合流しました。また艦砲がはじまりだして、近くの墓の中にかくれました。大里の本部につくまで二、三回墓にかくれて、ようやく朝の六時ごろになって到着しました。

こうして、バラバラになつた十隻の隊がやつと一か所に集まつたのは一週間ぐらいかかりました。私らはそこで糧秣運搬などやらされてきました。

ふたたび島へ

一週間ぐらいたつたころ、一四一五二部隊の防衛隊は集合」という伝令がきました。四一五二部隊というのは津堅島地区隊のことです。命令は、「津堅の負傷兵を護送してこい」というわけです。村田軍曹が指揮をとつて、兵隊三名、防衛隊十名で行くことになりました。

以前に沈めてあつたサバニを引あげて、ほかの一隻は知念半島の富祖崎でひろつて、この二隻に分乗して出発しました。まず久高島に渡つて、その海岸を漕いでいつて、干瀬に沿つて津堅に向つて

の前に見えるわけですが、そこに米軍の戦車が十四、五台やってくるのが見えました。何をするのかと思つて見ていたら、昨日われわれがいた山をめがけて一斉射撃をやりだしたんです。われわれが居たことがばれていたんですね。私らはそれを見物していましたよ。

夜になって、またサバニを出せと言われて、今度は目標は与那原の球部隊の本部です。出発のとき、亭島隊長は、もし途中で掃海艇にぶつつかつて舟がやられたら、泳いでいつて手榴弾で攻撃するようになり、と命令がありました。隊長の舟をまんなかにして、各舟に防衛隊員が船頭になって、十隻並んで出発しました。中城湾は敵艦がうようよしていつぶつかるとヒヤヒヤしましたよ。夜の十二時ごろだつたかと思ひます、出発したのは。

岬をまわつてホワイトビーチの沖にでると、前方に黒々と艦隊が見えてきました。その時照明弾があがつて、どうも発見されたようなんです。私らは舟の底に伏せて、明りが消えてから、ゆっくりゆつくりと艦隊の間を進んでいるうちに、ほかの舟たちとはバラバラになつてしまいました。そのうち、二隻はヤブチ島にひっかえてしまつて、ほかのも行方不明になつてしまい、まっすぐ与那原に着いたのは三隻だけだつたそうです。私らの舟が着いたところは西原村の我謝の海岸でした。この舟には野砲隊の班長をしている坂田軍曹が乗っているんですが、この人はあわててしまつて、ここから与那原まで歩いていこうと言うんです。陸上はもう敵が占領しているはずだからそんなことはできませんよ。そこで急いでひっかえて今度は、現在の知念高校の海岸につけたわけです。舟は、巻脚絆で石をつないで水中に沈めておきました。そのとき後の艦隊から曳

いきました。途中、敵の潜水艦に発見されてしまつて、機銃掃射されました。こちらは何一つ武器は持つてないから、舟をひっくり返してその下にかくれていました。潜水艦をやりすごしてから、ようやく津堅にたどりついて、物音をたてないようにゆっくり漕ぎながら島をぐるっと廻つていくと、陸の方に戦車がたくさんいるわけです。まだ陸にいるんだなと思つて、また舟をひっくり返してかくれたわけですが、後でわかつたんですが、これは破損した戦車を一か所に集めてあつたわけです。島は上陸前に艦砲でたたかたかたかれ、家なんか、残っているものは後から付け火されて、一本の木も一軒の家もなくなつていっています。米軍には隠れる場所がないから不都合なわけです。それで占領したあといつたんは勝連の方へ引揚げていつて、私らが着いたその時は米軍は島にはいなかったわけです。

夜が白々と明けるころになつていたので、陣地壕にすぐ行くのはあきらめて、ひつ返してきて住民壕の方に舟をつけたわけです。そして、ちょうどその海岸で私の父が山羊を殺していたんです。父はびっくりして、「夢ではないか。あんたたちは、島ではもうみんな死んだと思つて供養までしていたんだよ」と言っていました。

金城、官城、山里一等兵と私の四名は、サバニを陸に引きあげてから防空壕にはいつていつてすぐ着物をかえました。堀水で濡れた軍服はあによめが洗濯をして近くのアダンの木に干してあつたんです。そして、そこへ防衛隊長の荒井軍曹がやってきました。荒井軍曹は、戦闘中も鉄帽をかぶらないで日の丸のハチマキをして歩いていましたが、このときもハチマキをまいていました。逃亡兵

をさがして歩いていると軍服を干してあるのがみつかったわけです。「おまえら逃亡兵だな」と大きな声でどなりながら壕の中へはいってきたんです。相手に言いたいだけ言わせておいてから、こちらが自分らの任務を説明すると、向うの方がびくびくしてしまっただけにこちらに敬礼をしたもんです。

戦場中に逃亡した兵隊がたくさんいて、その連中は見つけたい首を落していいたいということでした。防衛隊からもずいぶん逃げているんですが、正規兵にも逃亡したのがいました。あのときの部隊の中はでたらめでしたね。ふだんから、伍長とか兵長とか上等兵なんかが初年兵をいじめるわけですよ。それで戦争が始まると、初年兵はやけくそになって、上陸まえから自殺する兵隊もいたし、いよいよ戦場が始まると、今までいじめられてきた古年兵を殺したりしてしまいました。初年兵に殺されたのはたくさんいましたよ。どうせみんな死ぬんだからと、敵は殺さんで友軍に弾を撃った兵隊もいましたよ。

荒井軍曹につれられて三六陣地に行ってみると、この島で元気の兵隊は、途中でひっかえした二隻のサバニの乗組員だけだったわけです。玉野曹長の指揮で、これから傷病兵は全員舟で運んでいく、ということになりました。二本の棒にカマスを張って担架をこしらえて、泊浜まで患者を運んでいきました。全部で三〇名ばかりいたと思います。全部運び終って舟を降ろす段になって、時計を見たらもう三時になっているわけです。防衛隊長が、「今から舟をだしたら夜が明けて全滅しかない。明晩に延期しよう」と言っただけ、急ぎまた患者を三六陣地まで運んでいきました。陣地はいっぱいになってしまっただけで、自分たちの寝る場所がない。それで私はいちばん端

って奥の方へ逃げこんでいるわけです。無理に入っていくと、誤まって殺されるおそれがあるから、入口から「静ヨー静ヨー」と声をかけたら、奥の方から、看護婦たちがみんな泣きながらとび出してきたんです。不思議なことにみんな無事でした。陣地の中の模様を聞くところです。陣地のなかには、東風平村出身の軍医がいましたが、この軍医の命令で、患者は全員薬で自決したそうです。防衛隊も一緒にいるわけですが、この連中は米軍がいくら呼びかけても出てこようとしないわけです。しばらくして、米兵が銃を構えながら壕内に入ってきました。そしたら、荒井軍曹が横穴に身をかくして、入ってきた兵隊を軍刀で斬り殺してしまったわけです。その叫び声で、壕の入口にいたほかの米兵たちが、壕の中にガソリン罐を投げこみ手榴弾をぶちこんできました。傷病兵の寝ていた枕もとには弾薬箱が積んであったので、これに火がついて陣地はいっぱんに吹きとばされてしまったそうです。

さいわい、看護婦たちは奥の方にかくれていたもので、粗ばしごをつたって下の壕へ逃げていきました。壕は三段からなっているわけですが、一段二段は全部つぶされてしまい、いちばん下の壕にかくれていたわけです。その入口は偽装のために土をかぶせてあったわけですが、たまたま私らがそこを掘りおこして、みんなは助かったわけです。

結局、津堅地区隊の三五〇名の兵隊のうち三〇名をのこして全部戦死したわけですが、島の人たちで死んだのは、防衛隊員も含めて十名ぐらいではないかと思えます。

三六陣地は後でもう一度爆破されて、今でもたっくさんの遺骨が埋

つこにある陣地に行つてそこで寝ることにしました。

十分ぐらい寝たかと思つたころ、三六陣地から伝令がきて、「今北側海岸に敵戦車が上陸したから戦闘準備せよ」と言うから、私らはあわてて、巻脚絆も巻かずにとびだしていったら、もう目の前に敵は迫つてきて一斉射撃がはじまっているわけです。三六陣地まではもう行けない。宮城シンシが、「もう最期だ」と言つて、銃は折つて捨てて、鉄帽も軍服も腕ぎ捨てて、フンドシ一本になって家族壕の方に逃げていきました。玉城という伝令も三六陣地まではひつ返せないの、私らと一緒に住民がかくれている壕へかくれていました。

住民のなかに一緒にいると逃亡兵とみなされて首がとぶおそれがあるので、みんな軍服は脱ぎすてて、ふだんの着物に着がえて、ずっとそこにかくれていました。

やがて戦場はやんで、敵の戦車隊が三六陣地を占領してしまいました。山の頂上にアメリカ兵がいて、「殺さないから、出てきなさい」と呼んでいるのが聞えました。

三六陣地には、患者と一緒に補助看護婦たちも入っているわけですが、補助看護婦というのは、島の女子青年団員が三〇名ばかり軍にとられているわけです。私の従兄の次女がこの補助看護婦隊におりましたので、このことが心配で、私ら、父と伯父と三名で、アメリカが引揚げてしまった後から陣地へ行つてみたんです。そしたら、陣地は何もないんです。とこがどこかわからなくなつていて、念のために、いちばん下の壕の入口辺りを掘つてみると、中は無事だが誰も出てこない。人の気配はするが、こちらを敵だと思つてかえ

れたままです。私は「森の中」の家族壕でみんなと一緒に捕虜になりました。

子どもをかかえて

勝運村字津堅 知念 トキ (三五歳)

十月十日の空襲は、空襲ともわからないで、男たちはみんな海に出ているし、女たちは軍の徴用で弾薬運びをやっていました。弾薬は格納庫に分配していれてあった。毎日弾運びばかりさせられていた。

アメリカの飛行機が飛んできたが、友軍の飛行機だと思つて、バンザイ、バンザイをして、グラマンが低空してきて燈台に向つてパラパラやりだすまでは空襲だともわからないわけです。私らは、そのころはイモシカ食べられなくて、食糧不足がひどくて、ウムニイをこしらえて、子供たちを学校へやろうとしたら、東の空から飛行機がやってきて、ブラジお婆が「空襲だよ」と言つてきたので、子供たちを防空壕にかくしました。そのときの防空壕は屋敷内の豚小屋(便所)に、上からアダン葉をかぶせて、その上から土をかぶせて、そんな簡単なものです。戦さの味もわからないもんだから、最後まであんな防空壕だったらこの島で生きのこつたのはなかったはずですよ。

その朝は、早くから嘉手納あたりでドロンドロンしているのに、友軍の演習だと思つていたわけです。ここへきたのは朝の八時ごろ

ですよ。子供の学校がはじまる前ですから。

男たちはもう海に出ていたわけです。私の親戚の男二人が、舟を機銃でやられて、二人は即死して、舟は流されて浜比嘉の海岸にあがっていたそうです。

燈台はまっさきにやられてしまいました。うちのおとうさん(主)は前の浜で旅館をやっていたんで、そこに居たわけですが、浜では転馬船がやられ、伊計島から薪を積んできたマールン船が、これも燃えてしまって、私たちはそれを見て、ここでは危いと、パーク(ざる)にイモを入れて、子供たち四人をつれて、宮崎に疎開した人が掘った頑丈な防空壕があったので、そこに逃げていきました。夜になってから、子供はおんぶして、北海岸にあるムラ基に移動して隠れていました。クボー山には軍の陣地が掘ってあるが、ここには住民はいれないので、みんな村墓の方に逃げていったわけです。この空襲で部落の半分は焼かれてしまいました。

十・十空襲のあと、この島にあらたに茨城県、栃木県の部隊がたくさんやってきました。この部隊が私らの豚小屋の防空壕を見て、「こんな防空壕では人民はひとりも生き残れないから、早く横穴壕を掘りなさい」と言われて、鳩川(ホートゥガー)からクボー山の海岸べりに、めいめい家族、親戚の壕を掘りまして、これで私たちの命をかきました。青年団は前まえから山の方に防衛壕を掘ってあって、これは頑丈なものでした。

翌年の二月ごろからは空襲がはげしくなって、この横穴防空壕にかくれて助かりました。このときの空襲で私の家は焼けてしまいました。屋敷内に大きな爆弾が三つ落ちて、一つは裏のガジュマルに島で死のうと、夜からまた島へ逃げてきたわけです。平敷屋の山にかくしてあったサバニは盗まれてしまって、浜に残ってあったのは機銃でやられていました。舟を浜に並べて着物をぜんぶ脱いで布きりで穴をふさいで、四月はじめごろだから寒くてふるえながら、各舟に船頭をひとりずつつけて女たちが糧で漕いで、舟を出そうとしたら水が漏ってきて沈みそうになり、荷物は浜に投げ捨てて、首まで水につかって舟を浜に戻して、また修繕してから何とか漕ぎだしたものです。

そのときは中城湾にアメリカの船が湾いっぱいにウヨウヨ浮んでおって途中から泡瀬方面に照明弾がポンポンあがりだして、真昼間のようになってしまったわけです。その間を、音をたてないようにゆつくり漕いでいって、島の北の浜に着いたのは夜中の三時半になっていました。島のぐるり友軍の番兵(歩哨)が立っていたから、そこに知っている兵隊がいて、「もう三時半だから防空壕に行くまでには(夜が)明けてしまう。ここでかくれていなさい」と言っていて白にぎり飯を五個もってきてくれました。「よくかみしめて食べなさいよ、子供たち」と私は言って、半分ずつに割って食べました。中には味噌もはいつていました。この兵隊は、作業の途中などに私の家に寄ってイモなどを食べていましたから、その恩を忘れなかったわけです。私たちはこれで助かりました。

玉野曹長は私たち疎開者の引率者ですが、この人が、めいめいの壕に行つて絶対に外に出ないように注意しました。それで、海端の壕にずっとかくれておったわけです。明日とあきつては大空襲がくるよと言われていたが、それからすぐアメリカの上陸がはじまった

落ちたんですが、この破片が屋根のカヤにつきまきつて、これでいっぺんに焼けてしまったわけです。それから、夜は防空壕で寝とまりする生活だった。

軍からは山原(国頭地方)に疎開するように言われたんですが、私たちは疎開はいやだと言つてグズグズしておつたら、もう空襲ははげしくなるし、けっきょく疎開はやめたわけです。山原に行った者もいたが、これはかえつて苦勞していますよ。食べる物もなくて、子供たちをたくさん死なせています。私たちはいやだと言つて行かなかったからかえつて助かっているようなもんですよ。

いよいよ沖縄で戦争がはじまって、勝連の平敷屋部落に移動していきました。これは軍の命令で、男たちや働ける者は防衛隊、補助看護婦にとられて、年寄り、子供たちだけが疎開させられたわけです。私は、お婆さんと子供たち四名、まだ小学校の子どもたちばかりで、六名で逃げまわりしたわけです。おとうさんは第一回目の防衛隊にとられて本島へ行っているわけです。

夜なかにサバニ(くり舟)をだして与勝(半島)まで渡つていって、平敷屋ではマヤーガマ(洞窟)に避難していましたが、食べる物がなくて大変しました。昼はかくれて、夜から食糧さがしに歩きました。壕も自由にはいれるわけではなく、どこも避難民がいっぱいだから、十円払っても入れてくれない状態だった。夕飯を炊きにきた女たちが外へ出たとき、その人たちにまぎれこんでマヤーガマにははいった次第です。平敷屋には二か月ばかり居りました。

ところが、しばらくして、敵が読谷に上陸したよ、という知らせがはいつてきて、このままでは危険だから、どうせ死ぬなら自分のわけです。一回目が戦車八〇台、二回目が六〇台、三回目はもう数えられないぐらいの数で、はげしい戦さになったわけです。山の上にはドンドンと艦砲が撃ちこまれて、その震動で、土ぼこりで目はつぶれるし、腰の骨が痛みだすぐらい、それぐらい激しいものでした。

甥の信吉がうちの壕にやってきました。これは子供も三人いるが防衛隊にとられて、実際に戦つてきているわけです。これが言うには、「お婆さん、この戦さはもう日本の負け戦さだから、アメリカの捕虜になったら手も切られる、耳も切られるしかないから、ここで一族自爆しよう」、そう言つて、持ってきた手榴弾をみんなに配つたんです。私たちもそのつもりになって、死ぬ覚悟で暗れ着にかえようとしたんですよ。私の家族も信吉の家族も十名ぐらい一緒です。そして、信吉の次男が急に泣きだして、「こんな着物、着ない、とって捨ろ」とわめいたわけです。

私たちはぐんぐん神々という言葉もあるぐらいだから、これは何かの知らせかもしれない、今死んでも、今日明日の様子を見てからきめようよ、いったん自爆をあきらめたわけです。信吉は、「お婆さんは何を言うか。もう、新川グスクの友軍壕はガンリンを投げられて全滅しているよ。この島で生きているのはこちらだけだよ」と反対していましたが、私たちは自爆しませんでした。後でその手榴弾で魚をとって食べましたよ。

二回目の攻撃で友軍はほとんどいなくなっていました。友軍壕はうちの壕の上にありましたから、夜になってから、食糧をさがしに登つていってみると、グスク山の上は艦砲が吹きとばされて

しまつて壕はおしつぶされていきました。私たちはその上を越えて、水を汲んだり食糧をさがして歩いたりしましたが、まだつぶれていない友軍壕に米がそのままになっているのをみつけて、それを盗んできて、捕虜になるまで食べ物に不自由はしなくてすみえました。戦闘が終わってから十日あまりもそれで食いつないで、とうとう私たちは最後まで壕の中にかくれていたわけです。

そのころ、アメリカの舟艇がホワイトビーチのところからやってきて、ホートウガの海岸にやってきて、アメリカ通訳が日本語で「戦争は終わったから出てきなさい。出てきなさい」と言うもんだから、びくくりして、外をのぞいてみると、前の海の五〇メートルぐらい離れている岩のところに舟艇がとまっているわけです。ちょうど真正面ですよ。壕の入口は畳でふさいで目立たないようにしてありましたが、私たちがいるのを知らないのか、アメリカ兵たちは船から海にとびこんで海水浴をやっているんですよ。向うはのんびりしているがこちらはかえってこわくなって、もう大変だ、と思つてその夜のうちに、反対側の東海岸に逃げていったわけです。子供も多いことだから、夜の闇の中を何回も往復して、東海岸には壕もないから、小さな岩穴をみつけて、頭もあげられないぐらいの小さな岩穴に体をちぢめてかくれていました。

もう食べ物も自由に手にはいらなから、半つき米を夜ごと少しずつ炊いて食べて、その岩穴に一週間ばかりかくれていました。

そのころは、友軍は全滅して、島の生きのこりは捕虜になっていたわけですが、私たちは、知らせる者もないからずっと逃げかくれていたわけです。

この壕で捕虜になった人たちは第一回目の舟艇で本島の嘉真良（

現コザ市）の収容所にいれられていたそうですが、このころは四月はじめごろで、収容所の近くではパラパラ撃ち合いがあったそうです。それで捕虜になった人たちは焼けのこった家にいれられて、夜は絶対に明りをつけてはいけなと注意があったそうですが、子供のオムツをかえようとして明りをつけたら胡屋の崖の上からアメリカの弾をうちこまれて、いっぺんに二〇名以上が殺されています。今生きのこっている人で、大石のカメお婆さんは爆風で両目がつぶれていますし、安里のカメイお婆さんも足をやられています。源次郎先生は私の同級生の父ですが、この先生は防衛隊にとられて、西の海端で戦って死にました。

甥の信吉たちは私たちを残して、子供たちをつれて、寺沢という兵隊をかくまつて、浮原という無人島に逃げていきました。そこから後で浜比嘉（島）に渡っていったそうです。クボー山には三間ばかりの池があったんですが、ここには兵隊が自爆してたくさん倒れていました。負傷兵はもう手当てができないから自爆させてこの池に投げこんであつたんだが、しまいには池はいっぱいになってしまつて山積みになっていました。私たちは食糧をさがしにそこらを歩いたわけですが、地面は血でドロドロしているし、死体がごろごろして歩けないぐらいでした。

私の家のガジュマルにも豚小屋にも友軍の兵隊が倒れていました。が、この兵隊たちはみんな軍服はぬいで沖繩の着物をつけていました。

島じゅう家は一軒もなくなつて、艦砲の穴だらけで、何から何ま

そのうち、ミドンナのおばさんがやってきて、「エー、向うはアメリカが来て、みんな壕から出されて、食べる物もあるよ」と言うから、私たちははじめはウソだと思つていましたが、燈台のところへ行つて部落を見ると、アメリカ兵が銃をかついで歩きまわっているし、テント小屋からは炊事の煙があがっていて、これはほんたと思つて行こうときめたんですが、お婆さんはなかなか合点しなくてぐずぐずしていました。それでも、ノミ、シラミは体じゅうをはいまわつているし、雨にもぬれどおしですから、これではもういから、強姦されてもいいからもう捕虜になろうと、子供をおぶつて部落の方へ行きました。捕虜になると、ホワイトビーチの方から舟艇がやってきてみんなは平敷屋の収容所につれていかれました。私たちは三回目の捕虜で、これで島の人は一人のこらず捕虜になつてしまつたわけです。私たちがいれたのは南風原の収容所です。収容所で五月二七日の海軍記念日を迎えたのを覚えています。

私たちの家族ではさいわい戦さか負けた人はいなかったですが、ただ、お婆さんは平敷屋の壕にかくれているとき、艦砲から爆撃、照明弾が毎日げしくボンボンやるし、これでとうとう少し気がおかしくなりました。平敷屋ではすぐ近くの壕に爆弾が落ちてきて岩におしつぶされて一家全滅になったところもありました。

島の人ではチクドドンチ（大城）のお母さんがやられています。壕にアメリカ兵がきて、「出てこい、出てこい」と言われたが、そばに居るおじさんが、「今でていくと殺されるから出ていくな」とおしとめて、ほかの人は出ていって助かったが、後で銃をうちこまれて殺されています。

で真っ黒になっていました。

戦闘協力

勝連村宇津堅 鉄血勤皇隊員 大石光徳（十七歳）

島では、戦争が迫ってくると、防空壕にかくれていた住民に立退き命令を出して、与勝半島の塩屋、大田、具志川、内間、平安名、南風原、平敷屋の各部落に疎開させたわけです。私の家族は内間に疎開していたので、私も級友と一緒にそこにいたわけですが、私たちは水産学校の三年生で、鉄血勤皇隊の歩兵隊に編入されていました。私たちが上級生は国頭の宇土部隊に配置される予定でそこに待機していたわけですが、出発がおくれて、そのうちに米軍上陸になつて、結局ずっと家族と一緒にいたわけでした。

米軍が北谷に上陸して、一晩のうちに内間、平安名まで攻めてくると伝令が伝えてきたもんですから、うちの家族は平敷屋まで逃げていって、今のホワイトビーチの浜、そこでクリ舟をひろつて、夜のうちに島へ渡つていったわけです。これは村当局の伝令として、津堅出身の目取間さん、伊波さんがいたんですが、この人たちの指揮でまた島へ戻っていくことになつたわけです。

出発したのは、四月三日の夜十時ごろだったと覚えています。家族ごと親戚ごとクリ舟に乗つて島へ向つたわけですが、途中で敵に発見されたのか、照明弾がボンボンあがつてきました。

私たちは泊浜の北端にある岩山のところへ最初に上陸しました。

家族はいったん住民壕の方へ移して、私は荷揚げの手伝をやるうとまたもとの浜にひっかえしていったわけです。そこには、上原ハツ子、幸良ハル、大石ヒロの三名がさきに行っているわけです。私は少しくれてそこに駆つけたわけですが、そこでアメリカの偵察隊にぶつかってしまっただけです。私たちが一たん上陸して壕に行つて、またひっ返してくるちょうどその間に敵は上陸してきたわけですね。

岩山のところにゴムボートが十三艇ぐらい、アメリカ兵が音もたずに七、八〇名前後上陸してきていたわけです。私がそこへ行つていたときはほとんど上陸しているさいちゅうでした。さきに行っていた女たち三名はもうつかまっているわけです。私もなんの気なしに近づいていくと、たちまちアメリカ兵七、八名にとり囲まれてしまつたんです。

ツボタと名のる二世がいて、これが尋問するわけです。チョコロトとかキャンデーをさしだしながら、自由な日本語でいろいろきいてくるわけです。側に軍用犬もついて、陣地の配置とか、武器の種類なんかききたそうとするわけです。

私が立っているところはちょうど波うちぎわのところで、辺りは暗いわけです。尋問の最中に、私は相手の油断をみて、とりまいている兵隊を柔道で投げとばしたんです。囲みの外へ逃げだして、浜の方へ行くと後から撃たれるおそれがあるから、海の中へとびこんだんです。後からは発砲してこなかったです。無我夢中で一〇〇メートルばかり沖へ泳いでいて、もう大丈夫だろうと思つて、そこから南側へ三〇〇メートルぐらい泳いできました。そこに友軍の

最初は南の砂浜と東の干瀬の方から上陸が開始されています。朝の十時ごろから上陸してきてものすごい白兵戦になりました。四時ごろになるといったん撤退して、部隊は交替して波状攻撃をかけてくるわけですが、一部は島に残つて夜間戦闘をやつていました。夜間戦闘では友軍の斬込みをかけられて、ほとんど銃剣に刺されて殺されたそうです。戦闘は三日間続いて、弾薬がなくなるまで続いたようです。アラカワグスクの壕（三六陣地）では亭島隊長が最後までがんばっていたようですが、歩けるのは外へ出て、歩けないのは自爆してほとんど全滅したそうです。

私は、戦闘が激しくなつてからは家族と一緒に壕にかくれていましたが、四月十六日ごろ、壕にかくれているところを家族と一緒に捕虜にされました。このときは住民も兵隊も一緒に捕虜になりましたが、三日間の戦闘で部隊は武器も弾薬もぜんぶやられて、全滅状態でしたから、捕虜になったのはぜんぶ負傷兵でした。水陸両用戦車が十台やつてきて住民は与勝に運ばれていきましたが、軍人はまっすぐ屋敷の方へつれていかれました。長嶺曹長などは負傷してつかまつたんですが、この人は戦車一台にひとりだけ乗せられていかれました。兵隊で生き残ったのはほんのわずかだったと思います。住民の方は、戦車が十二台、一台に五〇名から六〇名つめこまれて、コザの嘉真良の収容所につれていかれました。そこで十七、八歳の男からは兵隊とみなされて、金網囲いの中に入れられました。私たちは最初のころの捕虜で、金網には七〇名ぐらいの男たちがいられていました。

陣地があるわけです。

私が報告にいったところは八陣地というところで、重機関銃部隊のあるところです。そこに松根源次郎先生がいて防衛隊長をやっています。この人のところへ行つて報告したわけです。

守備隊の方では私たちが与勝半島からひき揚げてきていることもまだわからないわけです。敵が上陸してきていると聞いてびっくりして、すぐ射撃をはじめたわけです。米軍の方ではかなりの武器、弾薬を陸揚げしてあつて、偵察隊のあとから戦闘部隊も続いて上陸していたようですが、日本軍の一斉射撃にあつて、一発も発砲せずに撤退してしまいました。

つかまっていた女たちはこの射撃のさいちゅうにスキをみて無事逃げかえってきました。後からついてきた避難民の舟は偶然にも島の東側にたどりついてこの戦闘にはまきこまれないで済みました。

その翌日からはいよいよ本格的な上陸戦です。朝から艦砲射撃がはげしくやつてきて、トンボ飛行機が上空で旋廻すると、その飛んだあとは艦砲でめちゃくちゃにやられています。私の記憶では四月四日から艦砲がはじまって、五、六日と戦闘が続いたと思います。

私は八陣地の重機関銃隊の壕で、松根防衛隊長の指揮で、弾薬運びをやりました。ソーマン箱ぐらいの大ききの弾薬箱を運ばされました。私たちには武器はまわらないから、竹槍と手榴弾二個をもっていました。この手榴弾は拾つたものです。艦砲がはじまると壕から一歩も出られない状態でしたが、いよいよ上陸だからと、ありあわせの道具をそろえたり、石までひろつてきて、これでアメリカ兵を殺すんだといつて住民まで準備をしていました。

久高のアンマー部隊

知念村久高 西 銘 カメ（四九歳）

陣地構築作業

十月空襲のまえから作業隊に徴用されて知念岬の陣地作業に通っていました。五十歳までの男も女も、一班から六班まで舟も割り当てられて、東の浜に七時集合、知念岬のウガン浜に八時について、そうして兵隊さんと共に働くようになったわけです。

久高は昔から女ばかりの島で、男たちは南洋方面に五年も十年も漁業に行っていましたから、島にいる男は五、六名ぐらいしかいませんでしたよ。それで、陣地作業も女ばかりで、私たちが舟で知念岬につくと、兵隊さんたちが「おうい、久高のアンマー部隊」と呼んでいました。私は婦人会の会長をやっていましたから、このアンマー（阿母）部隊の責任者もやらされていました。

アンマー部隊は、兵隊が穴を掘れば土を運んで土置場におく、松の木を切れば原野から陣地まで一本ずつ運んだり、石を運んだりして、男に負けない働きをしました。

そうやって、毎日海を渡つて陣地作業をしているときに十月空襲がきたわけです。朝からパラパラやられて、このときはサバニ（クリ舟）がやられただけで、私らはティンデルガマにかくれて無事でしたが、それから疎開問題が起こつたわけです。

はじめの疎開問題のときは婆さんたちが反対して「なぜあんなたちは行かんで年寄りだけ内地に送つて、みんな死なすつもりか」と

いって、とうとう誰も希望者がでなくなりました。この島は昔から神の島といわれ、軍隊もこない、弾もこない、と安心していただけです。

十月空襲でいよいよ島も危いとかわかって、役場の人とか巡査など来て、黒板に説明を書いて、「疎開というのは人間の種を残さんのために日本に送るのだ」といったので、それで婆さんたちも行く気になって、皆んなで島を立退いたわけです。昭和十九年の十二月ごろだったとおぼえています。

しかし、その時からはもう時局ですから、内地には送られないで、本島へ行って、めいめい行くべきをさがしなさいといっていて、それで久高の人たちは漢那へ疎開していったわけです。でも、この疎開は年寄りや子供たちだけで、「該当者」は知念岬に残されて、相変らず陣地構築作業をやらされたわけです。

うちなんかは、西銘盛次郎さんの運搬船で家財道具といっしょに安座間口まで渡って行って、そこで疎開と徴用に分けられて「該当者」になったもんだから、しようがなくて、娘ふたりと親戚の者と四名で陣地作業にかよったわけです。

知念岬で宿を借りて、配給は二合ずつありましたが、イモを買ったり、また、情報がいい日はサバニで久高まで渡って、自分の畑からイモや野菜を取ってきて、そうやって食べていたわけです。

うちたちがつくった陣地は知念半島のちよと先にあって、高射砲をすえつけてありました。当時島の若い者はみんなとられて、五〇〇名ぐらいいしきなくて、そのうち三〇〇名ぐらいいはさきに疎開していますので、このアンマー部隊というのおそらく二〇〇名ぐ

きて、久高の人たちはあっちこっちから集まってきて「どうしたらいいか、どうしたらいいか」と相談して、それでみんなゾロゾロ歩いて佐敷村の方まで行ったわけです。この佐敷のまんなかで防衛隊が見張っていて、通さないんですよ。これは沖組の防衛隊ですが、「これからは北部には逃がさない。いよいよ戦いが始まるから南部の守りをやりなさい」といって止めているわけです。安座間と手登根の間あたりですよ。

ある青年が私に向って「おかあさん、なんであんなたちは今ごろ村内にのこっていたわけか。もう、戦争ははげしくなるのに、これからは通されない。なんで早く逃げなかつたか。おとといまでは自由に通れたのに」といったわけです。「では、どうしたならいいですか、防衛隊さん」といったら「みんなひとかたまりに浜の方に座らしておきなさい」というから「なぜですか」ときくと「あんなはアタマがあるから考えなさい」といわれたわけです。

そこで私は島の人たちは浜の方に待たして、私はアンマー部隊の隊長でもあるし「これというならのこりますよ。兵隊さんの手伝いは何をしたらいいですか」といって防衛隊について行ったわけです。「あんなたちは防衛隊といっしょに馬の世話をしなさい」というから「私は久高の人で、久高には馬はいないから馬の世話はできませんよ」といって、わざと防衛隊からおかれて山の途中まで登って行って、暗くなってから浜の方にひっかえしてきたんですよ。

夜の十時ごろですよ。みんなのところにもどってみると、海はちよと干潮で、富祖崎から馬天まで弓形に干瀬ができています。そこでそこを通れば湾の奥の佐敷は通らんくていいわけです。そこで

らいのものだったと思います。この「部隊」は吉岡という隊長が指揮していましたが、この隊長は戦争で死んだんですが、死ぬとき「天皇陛下をうらむ」といって死んだそうです。

疎開

久高島は調査もない平和な島で、島でとれるものというと、イモ、麦、大根、豆ぐらいのもんで、米の飯は十八夜におかゆを炊いて食べるだけでした。

男たちはいなくて女だけの島になってしまっただけで、もちろん軍隊もいませんから、こんな島に敵が上陸するとは思いませんでした。それでも防衛隊をつくって、糸数武七さんが隊長で、竹槍訓練、避難訓練なんかもしていました。

ラジオもない電話もない、ランプ暮しだから、本島との連絡は信号旗でやっていました。夜は電燈でパチパチとやっていました。島の南の砂山の上に監視小屋をつくって、交替で見張りが立っていましたから、本島の斉場御嶽の方の部隊から空襲警報の合図があると防衛隊が「空襲警報、空襲警報」とメガホンで部落じゅうに触れまわっていました。

こんな島にまさか敵が上陸してくるとは思われませんでした。が、十月空襲で戦きることがはじめてわかって、それで疎開することになったわけです。

私たちは三月二十三日の戦争がはげしくなるときまで陣地作業をやっていましたが、そのとき、軍から「敵はいよいよ敵前上陸して読谷と港川からはさみうちにくるからもう逃げなさい」という命令が

みんな一列になって、声をださないようにして、干瀬を歩いて馬天の部落まで渡ったわけです。

それから与那原を通って、夜の十時から明け方の四時まで、足が脹れるまでずっと歩き通しですよ。子供をおぶって、鍋をガラガラさせて、ようやく知花までついたわけです。

朝の四時ごろになると、東の方から敵の飛行機がブンブン飛んでくるし、昼間はずっと森のかけ、岩のかけにかくれたりしていきました。子供たちが「カーチャンヨー、カーチャンヨー」と泣いている姿はもうどうしようもなかったですよ。

そうやって、石川のさきの屋敷まで行ったわけです。屋敷へついたら、屋敷は空襲でボウボウ焼けてしまっているんですよ。空襲は夜も昼もやってきて、疎開の人たちは大騒ぎしているわけです。

私らはまた北へ北へと歩いて行って、山原（国頭地方）に行けば久高の人たちが集まっていると聞いたもんですから、ずつと行ったら金武の方に島の人たちがいて、各班に分れてやっていますから私らも金武の開拓地の学校うらにかくれていました。

四月十日にはもうアメリカがやってきたんですよ。私らはすぐ捕虜になって、漢那の収容所に送られました。私はそこで一七〇名の班長をやらされました。そこに七か月いました。

私らは捕虜になって、アメリカの配給を受けて作業をやっていました。山にはまだ日本兵がかくれている、夜なかに寝ているところに「顔をだせ、顔をだせ」と物をもらいにくるわけです。山の中から出てくる兵隊は色も背ぎめて、かわいそうでした。キャベツの芯などもらっていたですよ。アメリカ兵は夜十時まで立って

で、引あげていくもんだから、それから日本兵が山から降りてくるわけです。

この疎開中に、島の人たちがずい分犠牲になりました。読谷にアメリカ軍が上陸して屋嘉まで攻めてきたとき、逃げない何でもないのに、逃げる者はみんなやられたですよ。いよいよ敵が目の前にきて、自分の壕からとびだして逃げようとするその後からパラパラとやられたわけです。内間カマドさんの家は母子三名全部やられました。夫は八重山でカツオ船にのって離ればなれでした。ブンゾー屋も一家十名ぜんぶやられました。内間ウシさんは六十あまりの婆さんで、足の立たない病気で、この人だけが全員疎開のときただひとり島にのこった人でした。島へ帰ってみると家は焼け落ちて、婆さんは焼け死んでいました。このウシさんの夫は婆さんを島においたまま疎開したわけですが、この婆さんも知念にアメリカ兵が攻めてきたとき安座間で射殺されました。アメリカ兵があらわれると爺さんは鎌をふり上げて向っていったもんだからそれで撃たれたのだそうです。屋嘉でも西銘徳い、という爺さんがアメリカ兵の銃剣のまえに空手をかまえて向っていったが、これは相手が心がよくて殺しはしませんでした。

いちばん気の毒なのは内間ユキさんのことで、屋嘉にアメリカが攻めてきたとき、みんな散りぢりに石川の山に逃げこんだのですが、ユキさんは乳のみ児をおぶって山の中をさまよっていましたが、乳も出ないので子供は飢え死にし、気もつかないで背中におぶったまま逃げまわっているうちに五、六月だからすぐ腐って、臭いが立つてから気がついて、びっくりしてそのまま投げすてて、母親

島を追われて

知念村久高 福地ウシ (三九歳)

十・十空襲のとき島には男が十名ぐらいしかいませんでした。

軍からは、この島に敵潜水艦がくるから見張りをしろといわれて、女たちだけ六班に分れて、朝から弁当をもって見張り小屋に詰めていました。

女たちが竹槍をもって潜水艦の見張りをやるというから、私は腹が立って、「こんな竹槍をもって何をするか？タコをとるか、魚をとるか？潜水艦が大砲をうってきたらどうするね」と区長さんに言うてやりましたよ。

私の夫は南洋(パラオ)に行つて九年ぐらい分れていました。家族は八歳、十一歳、十六歳の子供と七六歳のお婆さんをかかえていたから、男まさりに意地をもたんといかんと張りつめていました。

島には兵隊はこないが、津堅(島)に陣地を作るといので、久高まで木材の伐採にきたことはあります。私らも宿を貸したり、炊きだしをしたり、女ばかりで労務に出たこともありです。私の家にはヤナブの木の立派な屋敷林があったがこれも二十本あまり倒されしまいました。

十・十空襲のあと、十二日から四日間、知念村に全員避難移動したことはありますが、これはすぐ帰ってきたわけで、いよいよ島から立退き命令がでて、島じゅうが立ち退いていったのは昭和二十年の一月七日だったと思います。これは軍命ですから反対はできんわ

だけ山を降りてきました。体はふらふらして気狂いみたいになっていました。後で背をひろいにいったんですが、どうしても見つかりませんでした。

島へ帰る

戦争が終つて、散りぢりになっていた久高の人たちは知念に集まつてきて、何名生きのこっているか、久高島はどうなっているか、だんだんわかつてきたわけです。そこで軍(米軍政府)の方で島を調査して、水に毒はいってないかどうか、家は何軒のこっているか調べてから島に戻ることにしたわけです。島はもとは一三〇軒ばかりありましたが焼けのこっているのは二三戸だけでした。そこでクジを引いて軍のLST(舟艇)で島へ帰ってきたわけです。二十一年の四月ごろです。

島へ帰つてくると、水はある家もあるが、食糧は本島から持ってきたものばかりです。そこで区長を責任者にして軍からの配給を分け、漁業班長、農耕班長をきめて、全員班に分れて、家は焼けのこのりの家を割り当て、食糧づくり立ちあがったわけです。農耕班は女だけです。私が班長になりましたが、イモの苗は知念村に行つて各部落からカズラをもらつてきて植付けました。班ごとに分れて、畑は戦車に敷きならされて見分けもできないから最初はみんな共同作業で復興させたわけです。時計もないから畑の畔に線香を立てて、この燃えるのをみて仕事の段どりをしました。植えつけて四か月半、初めてのイモがとれて、大人が二斤、子供は年齢によって分配しました。こうして、やっと昔の久高島にかえつたわけです。

けです。

島を立退くとき、荷物は一人あたり五十斤ときめられていました。私は蒲団、鎌、へら、黒砂糖、イモ澱粉、味噌など持っていました。その道具で疎開先の屋嘉で開墾をして、イモのかずらを植えたわけですが、このかずらが首をもたげたところにアメリカがやってきたわけです。

私らは知念の安座間に渡つて、そこからすぐ屋嘉に疎開させられた組です。微用の馬車を何台も並べて、小さい子供はおんぶして、足の弱い年寄りや馬車にのせて、雨が降っているのに、ずっと歩き続けて、二日間で屋嘉まで歩きました。

県庁ではあっちこちに出張所を置いて、婦人会の人たちが炊きだしをしてくれて、また、学校では先生に引率された生徒たちが次の学校のところまで荷物を運んでくれたりして、とにかく疎開は無事にできたわけです。村からも引率の職員をつけてくれたが、これは戦が始まるどころかへ逃げてしまつて、後で会つたら、「まだ生きていたか」、こうですよ。村長もシマ(村)に隠れていて、私らが帰つてきても「元気だったか」という一言もない。とにかく村は無責任だったです。

屋嘉へ着くと、久高の区長さんが婦人を集めて、「これからは戦さが終るまでは強く意地をもって、屋嘉の人たちと一致協力して兵隊さんたちと共に働いてね」と話してくれました。それからは私ら婦人は新取りや炊事で軍に協力して、その働きで軍から米の配給がありました。

区長さんは日本が勝つつもりで言ったんですが、私にはもう

先は見えていました。軍はしまいに配給どころか、兵隊が私らのところに物もらいにくるようになってきましたから、私は、「この戦争はもう勝つはずはないさ。こっちはあんな遠い遠い東の島から子供たちをひきつれてきたのにね。あんたたちまでこっちの食い物を乞うて食べたら、私たちは誰が守ってくるね、兵隊さん」こう言っていましたよ。

私も日本が勝つようにと東にも西にも手を合わせて拜みをしてきました。兵隊が住民の食糧をあさるようではもう誰の味方かわからない。「これでは日本は負けるね」と言ったら、兵隊は「日本が負けたらどうなるか」というから「負けたら私はさっさと手をあげて降参するさ」と答えると、兵隊はこわい顔をして「誰が教えているさ。神さまが教えてくれるさ」と言っていましたよ。私は久高の神人ですからね。

三月一日の空襲のときは屋敷にいました。疎開者は空家に分散していましたが、軍が防空壕を掘ってあって、その中にかくれました。戦さがパチパチはじまると、私は壕から出て民家にいたんだが、鍋を一つ持ってドブの中にとびこんで、頭に鍋をかぶって火をしのいだものです。空襲が終って、田んぼの水で体を洗って、ようやく山の壕までどどりつくと、子供らがワーワー泣いていました。

この空襲で家も荷物もぜんぶ焼けてしまっただけで、それからは山の山の壕住いをしていました。そんな戦さの中にも軍の飯炊きをやっていたわけですが、ある日、薪をとって山から降りてくると、もうがごろしているわけです。それでもこの頃は神経が何も感じなくて、私は手を合わせて、「戦さ世に追われて私らは辺野古のご先祖の墓にはいつております。私らを許して健康を見守ってください。わが沖繩から一日も早く戦争を終らせてください」、そう拜んでから、また近くの岩穴に移って、そこで一か月ばかりいました。

辺野古の海端はスヌイ（もずく）がとれて、これが何よりのごちそうで、海藻などを煮て食べました。鍋もいつの間にかなくしてしまっただけで、死んだ兵隊の鉄かぶとをひろってきて、潮水で炊いて食べました。

それから、大浦、嘉陽を点々として、東村の嵩江、新川の海岸に海人（漁師）の隠れ場になっているガマがあって、そこに何十人といっしょになって、海藻を食べながら隠れていたわけですが、そこではじめてアメリカ兵に捕まりました。目の前の海にアメリカの飛行機が墜落してきて、これを助けに沖の軍艦からボートがやってきて、このボートにみつかったわけなんです。私らがガマの中にかくれていると、「出てきなさい。出てきなさい」というから、私らは手をあげて出て行っただけです。「沖繩人かジャパニーか」ときくから、お婆さんが手のハジチ（入墨）を見せて、「おきなわ、おきなわ」と言ったら、アメリカ兵はおとなしく、お菓子とかマッパとかをくれようとするが、私は初めてみるアメリカ兵がこわくて、お菓子には毒がはっているとと思って、初めはみんな捨ててしまいました。

そのときは、若い連中はみんな山の中に逃げていましたが、私も、ボートに乗せようとするから、軍艦につれていかれて強姦され

そこまでアメリカが攻めてきていて、ピリンパランと英語が聞えるから、びっくりして、その夜から山原の北の方へ、伊芸、金武、漢那、辺野古の方へ逃げていったわけなんです。四月から六月半ばまで、ずっと逃げどおしでしたよ。

久高の人たちは、アメリカが攻めてきたときすぐ捕まって収容所にいれたらたのもいでしたが、半分ぐらい、三〇名ぐらいは逃げだして、それからずっと山のなかをさまよって苦勞したわけなんです。このころからは軍からも何の命令もなく、ただちりちりばらばらに食い物をあさって逃げたわけなんです。なかには、山原のずつとはずれの奥まで逃げたのもいました。

山原には段々畑が多いから、そこを、人が掘ったあとからまた掘りにいって、あつちこつちからひげいもを集めて食べていました。山の中からヨモギだとか草の葉を摘んできてこれも食べました。自分ひとりだったら死んでもかまわないが、子供のいのちを守るので頭がいっぱいで、自分は食べなくても子供には一口でも二口でもやろうと思えますが、自分も食べないと子供も心配だからと、そんなものを食べて生きていました。人間はどうやってでも生きていけるんだなと思えましたよ。お金ももっていたが何の使いみちもありませんでした。一日一食しか食べないのがあたりまえの状態でした。

辺野古の海端にいたのは夜で、昼は寝て夜しか歩けないから、真暗闇の中でようやく岩穴を見つけて、そこで寝たわけですが、円い石を枕に寝たつもりだったら、朝になってそれが人間の頭だとわかってびっくりしたものです。そこはムラ墓（部落の風葬墓）で骨

ののだと思って、すきをみて私ら家族は山に逃げこんでしまいました。それから、それからまた山の中をさまよって苦勞しました。とにかく山の奥へ奥へと向って、名も知らないところを歩きました。山道では地元の人や金をとって道案内をやっていました。どこまでつれていけば何十円というふうに山道を通ってにげていましたが、どこまで行けば安全というあたりはありませんでした。

そのうち、知念あたりは安全だという噂があったので、そこで南の方へ向うことにしたわけです。久志までくると、そこから舟があるというので、サバニを自分らで漕いで屋敷まで戻りました。はじめは高離（宮城島）へまっすぐ渡ろうとしたのですが、ある人が屋敷の壕の中に荷物をかくしてあるから取りに行きたいというので、それで屋敷の浜に舟を寄せたわけです。舟は女たちが自分でこしらえた櫓で漕いで、食べ物や畑から盗んだ豆腐豆（大豆）を蒸して、それを一粒一粒噛みながら、やっと屋敷までは着いたわけです。

屋敷の浜にあがると、向うからゴーツと戦車が押し寄せてきて、おし潰されると思って、逃げだして、また石川岳の方にかくれたわけです。

石川岳にかくれていると、食い物はないし私らもう長くはないものと覚悟していました。食べ物といえはカタツムリだけでした。その頃、金武には収容所ができていて、そこから女たちがいも掘り班でやってきたのにぶつかりました。「お婆さんたちはどこの人ですか」ときくから、「私たちは久高からだけど、どうしたらいいかね」と言ったら、「私たちと一緒にいもを掘りなさい。いっしょ

に收容所に行こう」とききました。

どうしようかと考えていると、婆さんが「あんただちだけ行って、殺されなさい。私はこのよ」と反対するので、その時はそのまま山にいました。

私らが捕虜になったのは高江洲(具志川村)ですが、そこまで逃げたときには、もうどこもかもアメリカ兵がいっぱいになって、そこがそのまま收容所になっていました。私は空家にかくれているところを、銃剣を突きつけられて捕まったわけです。

收容所にはいると、こんどはジャパニー(日本兵)がこわくなりました。夜中にしのびこんできて「食べるものはないか」といってくるんですよ。「あんたたちのおかげで、こんな哀れな目にあっただよ。こんなにして、食い物もなくなつて、どうして戦争が勝てるか」と言つてやりました。その兵隊は「お婆さん、心配はいらん。かならず勝つから」とまだ言つて、白いタスキをかけて、肉弾戦に行くのだといっていました。

防衛隊

知念村久高 安泉 松雄 (四三歳)

十・十空襲

十月空襲のとき私は国民学校の校長をやっておりましたが、朝六時ごろ、歯ブラシをくわえて庭に立っていましたら、東の方からたくさんのグラマンの編隊が飛んできました。みんな、友軍機だと思

つて「バンザイ、バンザイ」とやっていましたら、編隊は久高と津堅島の間を通過して、中城湾あたりから本島へ向つて降下していき、読谷飛行場あたりに黒い煙があがりました。平安座島、那覇方面も空襲されて、警戒警報が鳴ったもんだから、それからが鳥じゅう大あわてです。第一波は久高は通り過ぎてしまいましたが、すぐにこっちにもやってきました。

私は急いで学校へ重要書類を取りに行つて、そこで第一回の空襲を受けたわけです。四、五機のグラマンが学校をねらつて機銃掃射をやってきました。弾がプスンプスンと飛んできました。この久高の第一回の空襲が朝の七時ごろです。

書類をかかえて家の方へ走つていくと、家族はぜんぶ逃げていました。私は豚小屋に書類をかくしておいたんですが、そこにまた第二波がやってきました。島の人たちはすでにあつちこつちにある自然洞窟に避難してしまいましたので、私もそこへ逃げようとする診療所(現在)のところの福木のところでまた機銃掃射をやられたわけです。グラマンは三機編隊で、何度もくりかえしやってきました、おもに浜のサバニ(小舟)や、ちようどそこに着いていた山原(国頭地方)の薪船をねらつていました。

国民学校には生徒が百十何名いましたがそれぞれ家族と一緒に壕にかくれて、人命の被害はまったくなかったです。初めての空襲でびっくりしてしまい、この島にもいよいよ敵がおし寄せてくること実感でわかつたものですから、県からの疎開勧告には誰も希望者がなかったのに、空襲のあと、軍の命令で国頭へ疎開となったときには、これには誰もさからいませんでした。

防衛隊

私は、昭和二十年三月八日付で、疎開さきの知念で、防衛隊にとられました。球部隊(独混第四十四師団)の美田連隊井上大隊防衛中隊に入隊して、井上大隊の本部付きになりました。知念国民学校に集められて形ばかりの訓練を受けましたが、ほとんど、壕掘り、糧秣運搬、雑役などやらされていきました。この球部隊というのは、本土からきた現役兵と、沖縄の予備役と、それに防衛隊で編成されているもので、弱い部隊ですよ。にわか仕込みで訓練に明け暮れていたわけです。

ところが、五月上旬ごろ、いよいよ前線にもつていかれることになったんです。最初は私らは壺屋(那覇市内)の壕にいたわけですが、このとき、敵は東側の西原、幸地と西側の浦添・内間の線まで戦車隊を進めてきているというので、私らは壺屋の壕をでて、首里坂下から金城町の下を通過して、運玉森の裏の大名(南風原村)の壕にはいったわけです。

第二大隊はそこを根拠にして運玉森の激戦地に出たわけです。首里防衛線の第一線ですからね、すごい激戦で、私らの隊で十分間で何十名という負傷者がでるありさまでした。ここでは球部隊と石部隊(第六二師団)が一緒で、一寸さきみの戦闘でした。水をのむのも、ハンカチを泥水に浸してこれを絞つて飲んで、そうして五日間闘っていました。戦闘の途中から、どうしたわけか、今度は安里(旧真和志村)の後のプタノール会社の近くに移動させられて、ここで五月四日の総攻撃ですよ。安謝方面(西海岸)の第一線にまた進んだわけです。ここも激戦で、美田部隊の知念村の人たちはここで

みんなやられたわけです。私もここで、天久線の夜間行動中に、伝令をやらされて、そのときに眼をやられたわけです。

壺屋の壕に移されて治療していたわけですが、三日目ぐらいでしたか、敵の戦車隊は崇元寺あたりまで進出してきて、昼やってきて夜はひっかえしていきます。壺屋の壕からはすぐそこでしよう、そこで、独歩患者は歩かさされ、重傷者は幹部だけタンカで運んで、のこりは自決するように言われて、壺屋から撤退したわけです。南風原の陸軍病院から系数(玉城村)の野戦病院に行つて手当てを受け、それから知念まで来たわけですが、そのときは部隊は艦砲に追われてちりぢりになっていました。

帰島

知念の壕には傷病兵だけ残されていて食糧はありましたから、ここにしばらく居りました。食糧は傷病兵の係がいて、これが分配していました。そのうち、佐敷(岬の北側)までアメリカ兵が来ていふというので、知念もいよいよ危いし、そこで夜間行動で久高島に渡ってきたわけです。

そのころは軍の指揮系統はもうないですから、知念に逃げかえってきた久高の防衛隊や義勇隊の連中を集めて、皆で相談して、久高も危いとは言われていましたが、どうせここから南部へ逃げるよりも、死ぬなら島で死のうということになって、舟を集めたわけです。

そのとき集まったのは三三名、男も女も一緒でした。久高のサバニはみんな知念の海岸にもつてきてあつたから、これをさがしてきて、私らの舟には七名、知念の浜から漕いで島へついたわけです。

舟はみんなで四隻ありました。知念と安座間から出ています。他の防衛隊員は舟をかってばらって圍頭方面に逃げるのもしましたが、戦後、平安座島にはサバニがたくさん集まっていたとききましたから、圍頭までは行けなかったんでしょうね。私は、とにかく、島で死のうとばかり考えていたから、舟に乗れない連中までも、泳いで渡っているのがあります。みんな海人（漁師）ですから潮の流れに乗れば泳いでもこれです。なかには、摩文仁あたりから島づたいに知念までたどりついて、そこから久高まで泳ぎついたのがあります。このとき、アメリカの艦隊は中城湾をふさぐようにして並んでいて、掃海艇が島のまわりをウロウロしていましたから、夜間行動で舟をこぐといっても、櫓は舟端につけないで、音を立てないように漕いできたものです。

島に帰ってきたのは六月はじめごろでしたが、島はもちろん無人の島で、家はほとんど焼けてしまい、島じゅう戦車のキャタピラで荒らされてきました。家は艦砲や焼夷弾で燃えたものもありましたが後で火をつけたものでしょう。焼けたこった家も、柱など切りとられてみるかげもありませんでした。学校の東も西も敷きならされて野球場になっていました。戦車は西側の砂浜から上陸して、東側にまわって島を一周していました。兵舎はなかったが見張所みたいなものが一つありました。米軍はいちど上陸してから勝連の方に移動していったものと思います。その後は、勝連の方から、ときどき巡視艇が見まわりにくるぐらいでした。

島へ帰ってからは、私らは、めいめい山の中の自然洞窟にかくれていました。私はウブンシ山にいましたが、海岸に出て魚を取ったに取られて弾にあたって死んだのから、圍頭へ疎開して栄養失調やマラリアで死んだのが多いです。私の記憶で、死んだ数は、男十三名、女二四名、子供が二七名、合計六四名になります。当時、島の人口は四六七名でしたから、一割以上が死んだことになりました。

《資料》

身上申告書

現住所 知念村字久高一二一

安 泉 松 雄 (明治三六年十月二十日)

復員時の所属部隊 球部隊美田連隊井上大隊 防衛中隊

個有名 防衛隊陸軍歩兵

役 種 第一種国民兵

入隊(応召年月日) 昭和二十年三月八日

傷病(受傷年月日) 昭和二十年五月十八日

同上場所 真和志村安里

傷病名 右腕骨折、左眼負傷

受傷病の状況と経過 受傷後治療せしめその効なく左眼視力衰う。

行動

防衛召集令状を受け、昭和二十年三月八日知念村知念国民学校に集合、同日美田連隊井上大隊防衛中隊に入隊。井上大隊の本部付となる。壕掘り、糧秣運搬、雑役に従事。五月上旬ごろ運玉森の前線の戦闘に参加し、六日後安里方面の前線に移動して浦添方面の米軍と激戦す。この戦闘において負傷したため後方の霊屋野戦病院に送られ、五月下旬ごろ戦局不利のため衛生兵横田兵長の指揮のもとに

り、流れついたものを拾って食べたりました。アメリカの艦隊がすてたものが流れついて、カンヅメとかブドウ酒の樽など流れてきてごちそうしましたよ。家畜も山羊とか鶏とかいました私らは食べませんでした。畑にはいもがありましたからそれを掘ってきて、家畜はかえて知念方面から舟で取りに行く者がいたぐらいです。この島から摩文仁岬はよく見えるから、戦争のなりゆきはよくわかりました。六月になると沖の戦艦から摩文仁に向ってきかんに艦砲を浴びせているのが見えました。あるとき、友軍の飛行機が飛んできて、中城湾の敵艦隊に体当たりしていきましたが、これは船には当らず目の前の海に落ちてしまいましたよ。

私らは食糧には不自由しないで穴暮しをしていましたが、七月上旬ごろ捕虜になりました。勝連から巡視艇がきて十、二十名ぐらいのアメリカ兵が上陸してきましたが、これに見つけられて、「出てこい、出てこい」と呼ばれて、抵抗してもムダだと思ったからみんな捕虜になりました。私らは、軍服はぬぎすてて、フィッシュメン（漁師）だと言いましたから、金武の収容所につれていかれても民間人扱いでありましたよ。

昭和二十年の十一月三十日に収容所から解放されて、それから知念に送られ、やっと島へ帰れたのは二十一年の六月になってからでした。

久高の犠牲者

この戦争で島でもたくさん犠牲者ができましたよ。家族のなかで犠牲者がなかったという家はほんのわずかです。防衛隊や義勇隊

後方の知念村台上の壕に移動し、六月中旬ごろ部隊は解散状態になり、知念村字久高において米軍に収容せられ、金武村の収容所に入所、同年十一月三十日、同収容所から解放され帰郷す。以上

南洋移民

知念村久高 糸 数 平 七(四三歳)

久高島は昔から男は海で働いて女が島を守っていたから、戦争中も男たちはほとんど南洋に行っていました。昭和六年からパラオへ漁業移民がはじまって、久高の男だけで八〇名から一〇〇名ぐらいいました。向うの海は良い海で、カツオ漁がずいぶん分稼いで、島は仕事で豊かになっていました。はじめは単独で行って、二、三年して家族を呼び寄せて暮らしていましたが、戦争が近くなって女子供はまた島に引揚げさせました。

いよいよ敵が迫ってきて、パラオの輸送船は港の中で潜水艦にやられて全滅してしまいました。それで私らは現地召集を受けて兵隊になったわけですが、銃もない刀もないというありさまで、竹槍をもって戦えといわれました。

パラオには久高の人で船主がいて、漁船だけで五〇隻ぐらいありました。私は二五屯船に四十名ぐらい乗って渡ったわけです。魚は自分の船でとって、南興水産という内地人の加工工場にすぐ売りつけました。

久高の人で軍のタンク(燃料タンク)の請負いをやっている人が

いて一四〇名ぐらいの入夫をあずかっていました。この入夫は知念(村)の人が多かったんですが、支那事変が始まると召集されるのをこわがって南洋へきている人たちでした。パラオで戦争が始まると私らはすぐ捕虜になって、島へ復員してきたのは二十一年になってからです。

大 東 諸 島